

新時代における大学教育とは？

～ 社会体験が学生を変える ～

大和総研 リサーチ本部副部長

(東京大学、北海道大学、東北大学、上智大学 非常勤講師)

宇野 健司

目次

<論点1> なぜ日本の大学生は勉強しないのか？

～ 学生の「モチベーション」が問題 ～

<論点2> 「社会が求める大学教育」とは？

～ 「考える」「話す」「行動する」 ～

<まとめ> 学生のモチベーションを高めよう！

～ 「大学」「企業」「地域社会」の連携が必要 ～

<論点1> なぜ日本の大学生は勉強しないのか？①

- 外国人留学生からの侮辱：

「日本の大学生は、何で勉強しないの？」

「成績が悪くても、卒業できるね」

「日本の大卒は、海外の短大卒以下？」

- 本を読んでいない（400冊 vs 100冊）

- 「リーディングアサインメント」（授業前の必読資料）

- 授業に出なくても、単位がもらえることがある

<論点1> なぜ日本の大学生は勉強しないのか？②

A 外発的なモチベーションの問題

- (1) 成績が良くても、誰からも評価されない
- (2) 成績が悪くても、就活には関係ない
- (3) あまり勉強しなくても、卒業できる

<論点1> なぜ日本の大学生は勉強しないのか？③

B 内発的なモチベーションの問題

(1) 授業が一方通行の講義形式で退屈

→ディスカッションやグループワークなど**学生参加型の授業**を！

(2) 授業が実社会につながらない

→企業も、**インターン**や**実務家教員**を積極的に提供すべき

(3) そもそも「何のために学ぶのか？」の意識が薄い

→「**人生・キャリア・勉強する意味**」を考えさせる**キャリア教育**

備考1: ラテン・オナーズによる表彰制度

- **スンマ・クム・ラウデ** (summa cum laude) - 最優等の意。成績**上位5%**程度。
- **マグナ・クム・ラウデ** (magna cum laude) - 最優等と優等の中間。成績**上位10%**程度。
- **クム・ラウデ** (cum laude) - 優等の意。成績**上位15%**程度。

(例えば、ラテン・オナーズを受賞した皇后雅子様の場合、
B.A. in Economics, magna cum laude)

備考2: 「プロベーション」制度

- **G P Aが悪かった学生**（例えば2.0以下）には、成績回復のための猶予期間「**プロベーション**」が課される。
- もし次の学期に成績が回復しなかった場合、基本的には**退学**になる。
- つまり、**成績が悪い学生は、卒業できない仕組み**
(**質の保証** = ただ単位が取れただけではダメ)

備考3: アメリカの大学は、入試で「エッセー」を課す

- 「なぜ大学で学びたいのか？」 「何を学びたいのか？」
「将来どのような人生・キャリアを歩みたいのか？」などを
エッセーとして、**大学入試**で課す（合否に影響大）
- 日本は、大学3年ごろの**就活**で、同じことを考える。
⇒**アメリカ(高校3年)** vs **日本(大学3年)**で、3年遅い
- 「幼い」「協調性はあるが、主体性に乏しい」と企業は不満
⇒大学初年次からの「キャリア教育」が必要
⇒就活テクニックでなく**人生・キャリア・学ぶ意味**を考える

<論点2> 「社会が求める大学教育」とは？①

- 「即戦力」の誤解：

「企業が求めているのは、付け焼き刃の浅い専門知識？」

「そのようなスキルは、すぐに役に立たなくなる？」

「すぐには役に立たない学問こそ、学ぶ価値がある？」

- 「学問の場」 VS 「社会に出る準備」 ⇒ バランスの問題

- 「学究の時間」 VS 「自由な時間」 ⇒ メリハリの問題

※社会は「何を求めているのか？」を伝えて来なかった

<論点2> 「社会が求める大学教育」とは？②

A 「何を学ぶか」（知識）よりも「どう学ぶか」（主体性）

～「リベラルアーツ（教養教育）」の誤解～

①教養科目は、題材として「思考力の訓練」に適している

②「少人数ディスカッション」で自分の意見を発言し合う

③研究志向というより、「教育志向の教員」が指導する

⇒「知識を得る」& 自分で「考える」「話す」「行動する」

※つまり「何を学ぶか」より「どう学ぶか」（主体性）が重要

備考4： アメリカのリベラルアーツ教育の事例

「総合大学」 VS 「リベラルアーツカレッジ」

⇒前者は、大教室と少人数TAセッションの週2回授業が多い
(サンデル教授の哲学の全学科目→学生1000名、TA50名)

⇒後者は、ほぼ全科目がゼミのような10～20人の少人数授業

※いずれの場合も、1学期で4～5教科の履修が一般的
→1教科につき、週2回授業
→教科書：1冊、副読本：数冊 を1学期でこなす
(授業前に、指定ページを読了していることが義務)

⇒大量読書&ディスカッション&レポート提出で学生を鍛える教育

備考5: アメリカのTA制度は、うまく出来ている

- ①TA採用時の成績重視が、**学業へのインセンティブ**となる
- ②将来の教員のための**教育体験**として有効
- ③**アルバイト収入**の確保（地方にあるので、機会が少ない）
- ④TAによる**教員の負担軽減**
 - 余談：入試業務も、教員でなく職員に任せるのが常識
 - 大学職員のプロ化・専門職化・高度化
（日本も、アカデミック・アドミニストレーターとして
職員の専門能力・地位・社会的評価の向上が必要）

<論点2> 「社会が求める大学教育」とは？③

B ①専門知識だけでは不十分。

⇒②議論⇒③フットワーク⇒④プレゼン⇒⑤レポート作成

- ①まずは、大量に関連資料を読み込み、「専門知識」をインプット
 - ②チームで「議論」して、テーマ、課題、論点などを浮き彫りにする
 - ③「フットワーク」を使って、専門家などに意見を聞いてまわる
 - ④みんなの意見を集約して、人前で堂々とした「プレゼン」を行う
 - ⑤その内容をしっかりとした文章にまとめ、「レポート作成」を行う
- ➡この①～⑤のトレーニングが積めるなら、専門分野は何でも良い

※会社で事業の立案を任されても同じプロセス！＝ 社会が求める教育

<まとめ> 学生のモチベーションを高めよう！①

学生のモチベーション（＝大学教育のバリュー）の問題

「大学」⇒①ディスカッション、グループワーク、PBLなど
学生参加形式の授業を増やすべき

⇒②「人生・キャリア・勉強する意味」を考えさせる
広い意味のキャリア教育を初年次から導入するべき

「企業」⇒インターンや実務家教員を積極的に提供するべき

<まとめ> 学生のモチベーションを高めよう！②

- 東大・北大・東北大・上智大などでの授業や、年間300人の相談に乗り、学生と間近に接して来た経験から、「学生のモチベーションの問題（＝大学教育のバリュー）」が、改革の本丸であると実感する
- ➡問題の本質 = 「大学教育から実社会への橋渡し」に関する「産学官の連携不足・努力不足」
- ➡対策 = 「大学」「企業」「地域社会」で連携して、前述の当たり前のことを、当たり前前にスグやること！

略歴： 大和総研 リサーチ本部副部長 宇野健司

1985年 早稲田大学 卒業

1992年 ニューヨーク市立大学 大学院（MBA）修了

1996年 証券アナリストジャーナル賞 受賞

2004年から、大学での連携講座を提供。

（東京大、北海道大、東北大、上智大などで非常勤講師）

※学生主導の少人数ディスカッション授業（30名程度）
（2021年度～地方企業との「社会体験ワークショップ」）

連絡先： k7c7u7y7j7@gmail.com 070-2482-0567（直通）